湖入江なす岸縫ふて
見渡す限り廣ごりぬ
ちらと見し目に其數は
千萬ありと見ゆるまで
花を簪せる頭をば
樂しく舞を爲すがごと
ふり翳せるぞうれしけれ

花に沿ひたる細波は
共に躍りつ見ゆれども
花はそれともいやまして
喜ひわふるけはひかな
詩人はかゝる賴もしき
友だにわらばまたさらに
樂しみたえてなくもがな
かくて深くも凝視れば
思ひえしらぬ何ものゝ
われに景色をかくまでに
實とこそは見せしよな

さはれわが身の情なくて
氣もむすばれつ臥床にて
思ひに沈む其折りに
かの花影は眼底に
孤筇をいやす賜と
あふるゝまでにきらめきて
われとわが身を忘れつゝ
花水仙の舞ふ如く
わが身も共に躍るなり

御苑の菊

東くめ子

都のうちに　身はありと
思へと思へと　おもはれぬ
み池のすがた　山のさま
こゝや浮世の　外ならん
たゞ忘れては　み山路に
紅葉狩すと　思ふかな
夕日梢に　うつろひて
見る目映ゆき　秋の光

我大君の　御めぐみも
ひろきみそのゝ　菊の花
よのつねならぬ　色香をば
雲の上にて　見るがかしこさ

孝女

つねを
遠くきこゆる　雁がねの
聲もさびしく　ふけし夜は
しばぶく母の　まくらべに
春衣つゞるか　おと女子
ふたり

くらき燈火を　かき立てゝ
はかなくたどる　針のみち
ほそきけぶりも　たてがてに
夜ごと〳〵に　つむげる
いとの

あかきこころは　かくれなく
孝子のかゞみと　ひと郷に
ほめはやされて　名もしるく
ほまれも高き　をさな
はらから

冬のきて
山もあらはに木のはふり
殘る松さへ
峯にさひしき